

巻頭言

批判的判断力をはぐくむ



副研究科長 楠見 孝

京都大学教育学部・教育学研究科の教育目標の一つに「広い視野と異質なものへの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力」の形成がある。これは、批判的思考力(クリティカルシンキング)の育成といいかえることができる。批判的思考力とは、証拠に基づいて多面的、論理的に思考し、偏りがないかを内省して、適切な判断をおこなうことである。近年では、21世紀型スキルの1つとして、コミュニケーション、コラボレーション、クリエイティビティとともに4Cとして育成が重視されている。

批判的思考を長年の研究テーマとしてきた私にとって、第一の問題は、「批判的思考」が相手を「批判(非難)する思考」として、誤解を生みやすいことであった。その点、「批判的判断」という言葉は、「批判」の対象が他者ではなく、自らの判断が適切かどうかを内省することを示すため、攻撃的な印象を持たれないという利点がある。

第二の問題は学校教育への導入である。5年前くらいまでは高校の先生に対して、批判的思考力育成の大切さを伝えても、「大切なことはわかるが、大学入試が変わらない限り、高校教育に取り入れるのは難しい」という反応が多かった。しかし、近年、思考力を重視する教育と大学入試改革が進み、状況が変わってきた。たとえば、平成28年度に導入された京大教育学部の特色入試でも批判的思考力を重視する入試が行われるようになった。また、大学卒業時に身につけおくべき能力として学士力や社会人基礎力においても思考力が重視されてきている。

第三の問題は、批判的思考力をいかに育成するかである。一般に、批判的思考力のある人は、批判的思考のスキルをたくさんもっている。そこで、批判的思考のスキルを教えることによって、学習者は批判的思考ができるようになるという考え方がある。こうした考え方に基づく批判的思考教育は、ジェネリック(汎用)スキルの教育として、大学初年次ライティングなどのアカデミックスキルとともに育成することが多い。ただし、思考スキルだけを訓練するよりは、日常的または学問的な問題解決過程全体の中で教える方が効果が高いことが明らかになっている。したがって、プロジェクト

ベースの学習の中で、資料収集と読解、推論、討論や発表を通して、コミュニケーションやコラボレーション、クリエイティビティとともに育成することが大切である。今年度から授業方法を一新した「教育研究入門I」はこうしたタイプの授業である。

これまで大学では、思考スキルを明示的に教える授業は一般的ではなかった。学生は、講義、ゼミ、卒論などを通して、学問の世界に没入し、批判的思考力を高めてきた。しかし、こうした方法ではすべての学生が批判的思考を高めることができていなかった。そこで、もう一つの方法が、専門科目の授業や研究指導の中で、批判的思考のスキルを明示的に教えることである。たとえば、論点や暗黙の前提を明確化する、情報源の信頼性を評価するなどのスキルである。こうしたスキルを身につけることによって、専門の研究が的確にできるようになる。

それでは、教育学部、教育学研究科の修了時に「多面的・総合的な思考力と批判的判断力」が形成されたかをどのように評価すれば良いのか。これが第四の問題である。卒論、修論は、論文審査と口頭試問によって、学修の集大成としての成果に反映されている思考力を評価することができる。一方で、批判的思考力を測るテスト開発も内外で進められている。教育学部特色入試の課題のように、多数の資料を呈示して思考力を測るテストは一つの方法である。こうしたテストを米国の一部の大学では修了時におこない、そのスコアを、学生はGPAに代わる能力の証明として企業に示し、大学は4年間の教育成果を示すために使っている。ただし、テストには測定可能な能力に限界があるなど、導入するには課題が多い。しかし、大学において、実社会においても活用できる能力(ジェネリックスキル)としての思考力の育成と評価が重視されるようになってきたことは確かである。

京都大学教育学部・教育学研究科にとって、教育目標の一つである学生の批判的判断力を育むための方法と評価を考えることは今後の課題である。そして、大切なことは、学生が社会に出てから、京大で培った批判的判断力を発揮して、よりよい人生と社会を築くことであると考えている。